



近世後期の文人と煎茶 一田能村竹田とその周辺

船阪, 富美子

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2006-03-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲3629

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1003629>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



【 2 3 2 】

氏 名・（本 籍） 船阪 富美子 （ 兵庫県 ）

博士の専攻分野の名称 博士（学術）

学 位 記 番 号 博い第605号

学位授与の 要 件 学位規則第 5 条第 1 項該当

学位授与の 日 付 平成18年3月25日

【 学位論文題目 】

近世後期の文人と煎茶 ―田能村竹田とその周辺

審 査 委 員

主 査	教 授	影山 純夫
	教 授	魚住 和晃
	教 授	木下 資一
	教 授	寺内 直子
	助教授	宇野田 尚哉

論文内容の要旨

氏名 松阪富美子
専攻 人間文化科学
指導教員氏名 影山純夫先生

論文題目

近世後期の文人と煎茶―田能村竹田とその周辺

論文要旨

本稿は、近世後期の文人と煎茶の関わり、特に煎茶に対する意識について、田能村竹田を中心に考察する。

近世後期における文人とは、中国古典文学の素養があり、詩書画に遊ぶ尚雅の精神をもつ者をいう。担い手には、禅僧、医家、農商の富裕層、漢学者、下級武士、公家などがある。

煎茶は、漢詩・書・文人画・篆刻・瓶花・七絃琴・焚香・筆硯紙墨を始めとする文房具の賞翫などと並んで、いわゆる文人趣味の一つとされて来た。小振りの急須に葉茶（玉露・煎茶・茎茶）を入れ、涼炉（煎茶用の風炉）で沸かした湯の加減を調べて、急須に投じ、浸出したものを茶碗に注いで味わう。場所は、庭に臨む明るい居室や、自然豊かな清々しい戸外が好まれる。清浄な環境の中で喫しながら、俗世の喧噪から離れ、中国古典文学の世界に心を遊ばせることを娛しみとする。その際、煎茶を喫するのみでもよいが、通常、文房（書齋）を基本にした設えを伴うため、先に挙げた文人趣味が複合的に関わりをもつ。

このような煎茶の原初は明らかではないが、一つの契機として、明末清初の禅僧隱元隆綺（一五九二―一六七三）による山城宇治の黄檗山萬福寺開創（寛文元年、一六六一）を挙げることができよう。近世初期、隠元とその弟子たち渡来僧は、明末の中国文化をもたらしたし、交流のあった日本人に大きな影響を与えた。その中で、喫茶の場で詩文を詠むというような文人趣味が徐々に広まっていったと考えられる。特に、僧から還俗して煎茶を売り、後代の煎茶人にとって精神的支柱となった売茶翁（一六七五―一七六三）の存在は大きい。黄檗関係以外では、長崎の出島ももう一つの中国文化発信地となり、中国商人も

渡来僧と同様の役割を果たしている。

煎茶趣味が一般化するのには、関連書物から知識を得、唐物の器物が流通し、文人趣味が日本に浸透し、それと共に葉茶の改良が行われた、おそらくは文政・天保年間（一八一八―一八四三）あたりと思われる。明治・大正期には、好事家による中国色豊かで、より洗練された煎茶が大流行する。現在行われている煎茶の、器物の選択や設えは、この時期に培われた価値観に負うところが大きい。

本稿は、明治・大正時代に最盛期を迎える本格的な中国趣味の煎茶の先駆けとなった、文政・天保年間に煎茶人としての活動が顕著であった二人の人物を取り上げる。第一部では豊後竹田の文人画家として知られる田能村竹田（一七七七―一八三五）、第二部では京都の医師、小石元瑞（一七八四―一八四九）である。

第一部 田能村竹田と煎茶

第一部の目的は、田能村竹田の煎茶に対する意識を明らかにすることにある。

竹田は、近世後期の煎茶人として既に高い評価を得ているが、それは第一に、漢詩文を作り、書画等を嗜む文人としての教養があり、第二に、文人趣味が定着する時期に、積極的に中国の煎茶について学び、それを書き遺したことによる。

しかしながら、上田秋成・村瀬椿亭・頼山陽・青木木米らとの煎茶を介した交遊や、画家として竹田が遺した絵画作品を通してみた煎茶について語られるばかりで、竹田個人が煎茶についてどのような意識を抱いていたかについては、これまで解明されて来なかった。

第一章では、煎茶との関わりに視点を置きながら竹田の生涯をたどる。第二章は、従来から煎茶を象徴する語と見なされてきた「清風」に対する近世の煎茶人の意識について検証する。第三章から第五章までは、竹田が煎茶に対して用いた「清福」というキーワードについて、中国での基本的概念、竹田の概念、竹田の友人の概念を考察する。終章では、竹田が「清福」に抱いた概念を、林語堂の言説を通して理解する。

従来の煎茶観は、ともすれば、文人趣味という世界に目を向けずに、単に煎茶のみに焦点を当てていた感があった。しかしながら、冒頭に挙げたような文人趣味の構成要素は、本来は生活全般にわたり、煎茶に限らずそのみで成り立つものではない。必ず中国古典文学という背景世界の中で有機的に関係しつつ存在する。煎茶人は、そこに生きる中国の文人を憧憬し、生活全体が文人趣味を通して中国文人文化の影響を受ける。それは、中国の文人の人生の理想が、生活を楽しむことにあるからである。これは、享楽主義とは異なる

り、足るを知り、日常の一つ一つの営みを大切にし、心おだやかに生きるということである。文人趣味の原点には、この精神があると考えられるのである。

竹田は、日常に煎茶があることが「清福」であるという。このような、一見、取るに足りぬことがなぜ「清福」なのか。

「清福」を享けるためには、心に憂いのない状態でなければならない。そのためには、社会が平和で、戦争や飢餓がなく、したがって経済も安定しており、個人としては、健康や家庭、衣食住に関して不安のない状況でなければならない。これらが全て揃ってこそ、心おだやかな生活となり、それが「清福」を享けることになる。したがって、煎茶の時をもつことは、誰にでもできることのようにでいて、実際に行うのは決して易しいことではないのである。

竹田は、「清福」を享けること、つまり、退隠生活のような、心の安らぎを得られる日々を送ることが人生の理想であると感じていた。その「清福」を得る環境にあることの象徴として、煎茶が存在しているのである。

次に、第一部の章ごとの内容を紹介する。

序章では、まず竹田の略歴に触れ、次に、竹田の煎茶に関する先行研究を紹介し、残された課題を指摘した。また、竹田研究を行う上での問題点について触れた。

第一章では、竹田が自身の煎茶を確立した長崎遊学につき、遊学以前、遊学中、遊学以後に分けて考察した。

長崎遊学以前は、茶の湯を嗜み、一方では、煎茶についても先人から情報を得ようと努めている。文学上においては、煎茶はもとより、茶の湯も中国喫茶の系譜に連なるという認識にあった。しかし、煎茶の実践については、何を基準とすべきか試行錯誤の時代が続いた。

五〇歳での一年一ヶ月にわたる長崎遊学では、清人や長崎の人々の行う中国喫茶を体験し、その基準が明代許次紆の『茶疏』にあるということを学んだ。また、中国茶書『石山斎茶具図譜』を手に入れたこともあって、自ら煎茶書三部作『泡茶新書三種』を出版する。長崎遊学以後は、長崎での経験を踏まえ、自らの生活において実践し、煎茶を娛しんだ。第二章では、竹田以前の煎茶人が、煎茶の象徴「清風」をどのように認識していたのかを見た。

一般に、煎茶精神を示す言葉として、唐代、盧仝の「茶歌」に詠まれた「清風」がある。始めに、明清の茶文化を日本にもたらした黄檗宗の和僧月潭道澄、次に、その影響を受

- 3 -

けた売茶翁、さらに竹田と交流のあった上田秋成、最後に竹田を取り上げ、「清風」に対する意識を考察した。

竹田の場合、「茶歌」は、煎茶のみならず、茶の湯も含めた喫茶精神の源であると思っていた。したがって、「清風」を、すなわち竹田の煎茶観とすることはできない。では、煎茶の確立期から、本格的な中国趣味の煎茶へと移行する転換期に生きた竹田の煎茶に対する意識を表すものは何か。それは竹田の著した煎茶書にみえる「清福」である。

第三章では、中国の「清福」がどのような概念であるのかを考察した。

「清福」は、これまで取り上げられることがなかった概念である。抽象性が高く、使用される範囲も広い。そのため、まず中国での用法を概観し、どのような意味が込められているのかを見た。

その結果、中国における「清福」の概念は、第一に、日常生活を平穩無事に送ること、第二に、俗世間から離れて、自然豊かな環境や、故郷へ帰ること、第三に、文房で、書画の鑑賞や喫茶・焚香などの趣味の世界に遊ぶことであることが、明らかとなった。

第四章では、まず、文化年間（一八〇四～一八一七）の竹田の詩文に、どのように「清福」が表されているかを見た。竹田は、三十二、三歳頃に書いた書簡で、「清福」の定義について語っている。それは、日常を、四季の変化を感じながら、穏やかに過ごし、時には文人趣味に遊ぶ、というものであった。

次に、文政・天保年間の竹田の詩文を考察した。特に、文政九年から十年にかけての長崎遊学が、竹田の「清福」観に現実感を与え、また、それが煎茶と結びついた様子が、文政末から天保初にかけての著作や詩に現れている。

第五章では、互いの影響関係が推測される竹田の友人の詩文にみえる「清福」を取り上げた。彼らも、中国の例と同じく、自然、文人趣味、日常生活の中で「清福」を意識している。

終章では、まず、近世の煎茶書でたびたび取り上げられた「得趣」について、竹田の意識が、趣を得ることに止まるものではなく、その後の心情にまで及んでいることを指摘した。

次に、竹田の「清福」観を振り返り、竹田が煎茶を通して求めていたものが、「清福」で表現される人生の理想にあったことを、林語堂の『中国Ⅱ文化と思想』を手がかりにして解き明かした。

- 4 -

第二部

小石元瑞の煎茶趣味—究理堂所蔵煎茶具目録「茶具厨並平生心賞架品目」を中心に—

第二部では、竹田や頼山陽と近い関係にあり、煎茶を嗜むと認められていながらも、これまでその事跡については、ほとんど顧みられることのなかった小石元瑞を取り上げる。彼らにとって、元瑞は友人であり、主治医であり、後援者でもある。さらに、竹田にとっては息子の医学の師、山陽にとっては妻の義理の兄にあたる。この関係だけを見ても、彼らが共に煎茶を楽しんだ仲間であれば、互いにその影響を受け、価値観を共有したであろうことは、容易に推測できる。したがって、元瑞も竹田世代の煎茶観、つまりは中国の文人趣味の影響を受けた煎茶意識を持っていたと考えられるのである。

一般に、ある煎茶人の研究を行う場合、詩文書画などの作品、書簡・日記などの文書、煎茶具類や書画の収集品を資料とし、総合的に考察することが望ましい。しかし、現在のところ、これらがすべて揃うことはほとんどない。

たとえば、竹田の場合、煎茶具については、「旧蔵」、「遺愛」、「所持」などと称されるものはあるが、その伝来に不確かなものが多く、客観的にみて資料として扱えるものは稀である。書画作品も真贋の判定は困難で、資料と認められるものはわずかである。

元瑞については、これまで、木崎好尚氏、小川後樂氏によって「品茶記」が紹介されたが、それ以外については、煎茶研究において取り上げられることはなかった。しかし、このたびの調査の結果、相当量の資料が現存することが判明した。これにより、竹田世代の、しかも、竹田と同じ煎茶グループの煎茶の実態と煎茶意識を知ることが可能となった。

これまで、竹田と山陽、並びに周辺の人々の資料については、大正から昭和初期にかけてかなり詳細な資料調査が行われ、特に煎茶研究においては、その恩恵のみで昭和時代を終えたといっても過言ではない。

ここで、あらたな煎茶資料を提供し、今後の煎茶研究に寄与したいと考える。それが小石元瑞の煎茶具目録「茶具厨並平生心賞架品目」（以下「茶具厨品目」とす）、および収載品の実物煎茶具である。

現在のところ、煎茶の文献史料は、煎茶書と一般史料からの摘録に大別される。さらに煎茶書を分類すれば、その大半が煎茶全般（水や葉茶・喫茶法・煎茶具など）について記した概説書と、煎茶会記（茗議図録）で占められる。煎茶会記は天保期頃から見られ、明治・大正期は茗議図録と呼ばれて盛んに出版された。

煎茶具の専書について言えば、目録の類はなく、近世における個人の煎茶具一式を示す

文献史料としては、図録の木村兼葭堂筆「売茶翁茶具図」（文政六年刊『売茶翁茶器図譜』）のみということになる。

茶の湯では蔵帳として多くを数えることができる家蔵品の目録に当たるものが、煎茶においては、これまで確認されたことはない。したがって、文献史料によって個人所蔵煎茶具の全体像を知るすべはほとんどなく、会記や茗議図録、売立目録や流儀関係の書などからその一端を窺うしかなかった。以上から、煎茶具目録の存在自体の希少性が理解されるだろう。

また、「茶具厨品目」は、小石元瑞という、流儀に関わりのない全くの個人の収集による煎茶具目録であること、さらに、目録に記載された煎茶具の実物が一部ではあるが確認できること、などからもその重要性は明白である。

「茶具厨品目」から窺える元瑞の煎茶趣味の特徴は、第一に、宜興紫砂の急須を代表とするような唐物が中心であること、第二に、いわゆる茶器類にとどまらず、文人趣味全体を網羅するような幅広い分野にわたっていることである。これには、奇石、仏手柑や靈芝などの飾り物、仏子・如意・彈板から几（机）、灯、そして書画巻や帖などの品々が含まれる。第三は、品茶具が、牌や牌筒、急須なども揃い、充実していることである。品茶会の記録が巻子となって伝わっているが、そこで用いられたのは、これらの道具であったと推測される。

今後は、煎茶具の調査をさらに進めると同時に、元瑞の資料を詩文や書画など総合的に検討することで、近世後期の煎茶趣味の実態を明らかにできると考える。

論文審査の結果の要旨

氏 名	船 阪 富 美 子		
論文題目	近世後期の文人と煎茶 — 田能村竹田とその周辺 —		
判 定	合 格 不 合 格		
審 査 委 員	区 分	職 名	氏 名
	主 査	教授	影 山 純 夫
	副 査	教授	魚 住 和 晃
	副 査	教授	木 下 資 一
	副 査	教授	寺 内 直 子
	副 査	助教授	宇 野 田 尚 哉
要 旨			
本審査委員会は、船阪富美子から提出された論文『近世後期の文人と煎茶—田能村竹田とその周辺』について審査し、下記の結論を得た。 本論文は、江戸時代に活躍した文人田能村竹田の主に煎茶の分野における活動を研究対象にし、その独自性と煎茶史上での位置を明らかにしようとしたものである。 第一章においては、竹田と茶の関わりについて、長崎遊学前、遊学中と遊学後にわけ、若年から長崎遊学までは、竹田の周辺にいた文人の影響を受け、しかも病弱であったことから閑居することに憧れを持ち煎茶を嗜むようになったことを、長崎遊学中は清人と接触することで中国語を学んだほか中国についての知識を得、茶のついて理解を深めたことを、そして遊学後は清人から煎茶について学んだことを実践したほか、煎茶についての著作を著すなど活発な煎茶活動を行ったことを述べている。 第二章においては、煎茶精神と「清風」との関わりについて述べている。「清風」は中国唐の盧仝の「茶歌」に詠まれたことから、煎茶精神を表す言葉として用いられるように			

なったが、日本でも煎茶道の祖とされる売茶翁が「清風」の旗を掲げ、上田秋成が「清風」で煎茶を表し、竹田も「茶歌」の「清風」を受け継ぎ、その後も今日まで煎茶精神を表す言葉として用い続けられていることを明らかにしている。

第三章においては、竹田が「清風」を用いる一方で、自身の煎茶精神を表す適切な言葉として「清福」を用いていることを示し、それまでの中国で「清福」がどのように用いられてきたかについて多くの詩文を使って述べている。

第四章においては、竹田の詩文のなかで「清福」がいかに用いられてきたかを詳細に検討し、竹田は30歳代までは日々の生活の安泰を目指すことを「清福」と捉えていたが、晩年にいたって時間的に経済的に精神的に自由に煎茶を楽しむことを「清福」と捉えるに至ったことを明らかにしている。

第五章においては、竹田の友人達が「清福」についてどのように考えていたかについて述べ、竹田の「清福」の独自性を浮き上がらせている。

終章においては、直接には長崎での経験が、煎茶を通して「清福」を見据える契機となり、「清福」を享けることすなわち心の安らぎを得ることが人生の理想でありその象徴として煎茶が存在していると結論づけている。

本論文は、以下の点において評価することができる。まず第一に、これまで主に画家として研究されてきた田能村竹田の煎茶家としての活動を詳しく検討したこと、第二に、これまでの煎茶史においては「清風」が近世から現代まで煎茶精神を表すとされてきたが、竹田において「清福」こそがその煎茶精神を表すとしたこと、第三に、竹田における茶の湯と煎茶の共存を明らかにすることで、これまでの茶の湯批判として煎茶を捉える説を否定したこと、である。

加えて、竹田を初めとする諸家の詩文の検討は丁寧で詳しく、漢文学研究の上からも十分に評価できるものである。また、附説として取り上げられている竹田の友人小石元瑞の煎茶書の研究も、煎茶史研究上重要なものである。

以上のように、本研究は江戸時代後期の文人田能村竹田の煎茶について、重要な知見を得たものとして価値ある集積であるので、本審査委員会は、学位申請者船阪富美子には博士（学術）の学位を得る資格があると認める。

なお、公刊論文として「館柳湾の漢詩に見る煎茶」（『茶の湯文化学』第6号）、「梁川紅蘭琴詩考—江戸時代女性漢詩人の琴と詩—」（『鶴山論叢』第1号）、「田能村竹田の漢詩にみる煎茶」（『平成十二年度茶道文化学術助成研究報告書』）、「田能村竹田の詩文にみる煎茶」（『和漢比較文学』第31号）があるが、その内の「館柳湾漢詩に見る煎茶」と「田能村竹田の詩文にみる煎茶」は査読論文である。